共同研究の経緯

戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究

研究代表者　加藤 幸治

1．共同研究の企画について

本叢書は、神奈川大学国際常民文化研究機構　第2期共同研究（一般）「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」の報告書である。本共同研究は、共同研究のカテゴリ「4．常民文化に関する研究」において、2015年4月1日から2018年3月31日までを研究期間として進めた。2018年7月7日、その成果を国際常民文化研究機構第4回共同研究フォーラム「再考 アチック・ミューゼアムの水産史研究―“ハーモニアス・デヴェロップメント”の実像―」として公表し、本報告書はその内容をもとにまとめたものである。以下は、共同研究の趣旨である。

> 戦前に日本の常民文化研究の先鞭をつけた渋沢敬三は、アチック・ミューゼアムを主宰してミクロなフィールドワークにもとづく基礎資料や民俗誌を内容とした彙報等の刊行と、民具の収集によるコレクション形成を行った。その研究の柱を、渋沢は「民具蒐集」「漁業史研究」「文献索隠」と位置付けた。「民具蒐集」については、今日の民具研究の嚆矢としてその活動についての研究の蓄積があるが、「漁業史研究」については、その活動や刊行物に対する検討があまりなされていない。本研究では、渋沢水産史研究室と民具研究を中心とする第二部会が、活発に研究を展開していた昭和10年代前半を対象とし、その活動の実態解明を目指し調査研究を行う。

具体的には、共同研究メンバーがそれぞれ一人ずつアチック・ミューゼアム同人を担当し、戦前の調査研究と研究の経過を復元しつつアチック・ミューゼアム彙報およびノートとして刊行された成果について理解を深めていくという方法をとった。担当として、加藤幸治が伊豆川浅吉、磯本宏紀が山口和雄、今井雅之が吉田三郎と戸谷敏之、佐藤智敬が宮本常一、葉山茂が祝宮静、星洋和が楫西光速、増﨑勝敏が櫻田勝徳、安室知が渋沢敬三をそれぞれ受け持った。これに加え、宮瀧交二を中心としてアチック・ミューゼアムの研究の歴史的背景からの理解を、また揖善継を中心として魚類調査や自然史研究からの理解をそれぞれ深めていく体制とした。日髙真吾はアチック・ミューゼアム・コレクションの調査の面から、本共同研究に参画した。

本共同研究は、各メンバーのアチック・ミューゼアム同人の研究活動の理解のための「フィールドワーク」と、それを共有する「研究会」、諸機関に所蔵されているアチック・ミューゼアム関係の資料熟覧を中心とする「共同調査」の三つの枠組みで進めた。

本報告書の各メンバーの論考は、主として上記の「フィールドワーク」と文献調査等の成果であ

る。加藤幸治の論考の附録として掲載した神流川大学日本常民文化研究所所蔵「筌調査資料」、佐藤麻南の論考の附録として掲載した流通経済大学図書館所蔵「鯨肉に関するアンケート回答」、安室知の資料紹介として掲載した神流川大学日本常民文化研究所所蔵「魚名整理票」は、アチック・ミューゼアムの水産史研究の実際について知ることができる資料として、翻刻・整理して掲載するものである。

2. 共同研究の経過と報告会について

本共同研究の前述の三つの枠組のうち、「研究会」と「共同調査」は、以下のものを実施した。

①初年次の研究会と共同調査

＊第 1 回研究会の開催と宮本記念財団での共同調査

日程：2015 年 6 月 6 日（土）～ 7 日（日）
場所：神奈川大学 日本常民文化研究所・宮本記念財団
参加者：加藤幸治、安室知、日髙真吾、宮瀧交二、増﨑勝敏、佐藤智敬、葉山茂、揖善継、星洋和、今井雅之

2015 年 6 月 6 日、最初に研究代表者からこのプロジェクトの目的について、事務局より諸手続きについてそれぞれ説明をした。次に自己紹介と研究紹介をし、各メンバーのアチック・ミューゼアムの研究との接点について共有した。後半は、加藤幸治が「アチック・ミューゼアムにおける水産史研究室の位置づけとその研究課題」と題して研究報告を行った。研究会では、担当となったアチック同人の昭和 10 年代を中心とした調査研究活動や出版物などについて把握するため、当時の調査記録の調査、調査地の踏査による研究内容の理解、回顧録や追悼文集等の読み込みによる人間関係や活動実態の把握等の作業を進めることをお願いした。

翌 6 月 7 日は、共同研究メンバーの宮瀧交二の仲介により東京都台東区にある一般財団法人宮本記念財団を訪問した。財団では、宮本瑞夫氏より宮本勢助と宮本馨太郎のアチック・ミューゼアムへのかかわり、とりわけ保谷に建設された民族学協会附属博物館の関係資料について説明を受けた。宮本瑞夫氏との座談においては、アチック・ミューゼアムが“阿吽の呼吸”で役割分担が決まっていたこと、世代や学歴差が同人同士の関係に大きな影響があること、国立博物館建設のための一連の動きや文化財保護制度確立における渋沢敬三やアチック同人の深い関与、宮本馨太郎の研究態度や教育方針にみられる渋沢敬三の影響など、文字資料からは知りえない部分について語っていただいた。

＊静岡県・豆州内浦における共同調査

日程：2015 年 9 月 12 日（土）～13 日（日）
調査先：沼津市立歴史民俗資料館（静岡県沼津市）、沼津市内浦三津・西浦地区等
参加者：加藤幸治、磯本宏紀、今井雅之、葉山茂、増﨑勝敏

この共同調査の目的は、渋沢敬三が本格的に水産史研究に着手する決定的な契機となった伊豆内浦の大川家文書との“出会い”が、その後の水産史研究室における研究や彙報等の刊行物にどのよ

うに結びついていくのか、またアチック・ミューゼアムの若手メンバーが内浦の何に着目して研究を進めていったかを考え直してみることにあった。そして内浦から始まる取り組みが、同時代においてどのような意義を持ち、渋沢敬三の意図はどこにあったのかなども、この研究会参加者の共通の課題であった。

2015 年 9 月 12 日は、沼津市歴史民俗資料館にて、近年指定に至った国の重要有形民俗文化財「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」の調査を行った。同館主査の上野尚美氏から、国指定の経緯や資料整理作業、現在抱えている課題、内浦の漁業の特質等についてのレクチャーを受け、その後展示資料を含めて民具を見せていただいた。このコレクションを通じて、内浦の漁業がこれまでよく知られてきたマグロ建切網漁や定置網のみならず、さまざまなコショウバイと呼ばれる雑多な網漁・釣漁等が存在し、またカツオ一本釣り漁の餌用としてのイワシの商いや水産加工業などもみられることがよくわかった。こうしたさまざまな稼ぎの総体が、内浦をはじめとする駿河湾のなりわいと生活を構成していることに気付かされた。

研究会において議論となったことに、三陸の大謀網や富山湾の台網など、他地域との技術交流や人的交流がある。こうしたものは、アチックのメンバーのその後のフィールドの展開と関連する可能性もあり、『豆州内浦漁民史料』や彙報、メンバーの著作等を内浦との関係においてもういちど洗い直す必要があるという認識に至った。また、内浦の漁業に対するアチックのメンバーのアプローチは、あくまで経済活動の具体的な理解を史料とフィールドワークによって目指すものであり、必ずしも聞書きを中心とした民俗学的な手法を中心に据えているわけではない。このことは研究の意図や、ターゲットとする先行研究の位置づけなどに深く結びついていると考えられ、同時代の研究状況や内浦での仕事に対する評価等について再検討する必要が確認された。

写真１　大川家長屋門（沼津市内浦長浜・市指定有形文化財）

写真２　大川家での資料熟覧調査

写真３　網漁や漁船を描いた扁額絵馬の調査

翌 9 月 13 日は、沼津市内浦から戸田地区の踏査を行った。まず大川家を訪問し、現存する資料を見せていただき、昭和初期の大川家の状況等についてうかがった。渋沢敬三に資料を託した大川四郎左衛門は、キリスト者であり同家にはイコン等の持ち物が現存する。その後、沼津市西浦江梨の大瀬神社にて造船時や豊漁時に奉納される扁額絵馬の現地調査を行った。これら資料からは、明治から大正期にかけて、静浦から内浦、西浦、戸田に至る駿河湾奥の諸集落で昭和初期に営まれた、大規模な網漁がいかに活況を呈していたかがうかがわれ、敬三らはまさにそうした時期にこの地を度々訪れていたこともわかる。加えて、この地が漁村である以上に上流階層の人々にとって重要な保養地であったことも見逃せない。敬三の大川家文書との

“出会い”は決して偶然の出来事ではなく、様々な状況の結果としてとらえ直す必要もあるように思われた。今回の2日間の研究会と調査は、『豆州内浦漁民史料』について再考する機会となった。

＊第2回研究会の開催と国立民族学博物館での共同調査

日程：2015年12月12日（土）～13日（日）

調査先：国立民族学博物館（大阪府吹田市）

参加者：加藤幸治、安室知、日髙真吾、宮瀧交二、増﨑勝敏、佐藤智敬、葉山茂、揖善継、星洋和、岡田祐子（国立民族学博物館保谷資料プロジェクト室）

2015年12月12日は、国立民族学博物館所蔵のアチック・ミューゼアム収集の民具のうち、事前に申請した筌およそ100点を出していただき、標本資料に付随する情報と管理ファイル上のデータの調査を行った。調査の主眼は、国文学研究資料館所蔵の筌調査関連資料との関係を探ることにあった。民具を一点ずつ精査し、また県別に抽出したり、旧文部省史料館から引き継がれたデータとの照合を試みたりと、全員で協力して調査を行った。結論的には、国文学研究資料館の資料と国立民族学博物館の標本資料とは、ダイレクトに結びつくものではないことがわかり、水産史研究室の通信調査は民具収集とは基本的に別の流れで進んでいたと推測できる。

翌13日の研究会では、加藤幸治が「水産史研究室の通信調査について：宮本勢助の山袴通信調査を参考に」、葉山茂が「祝宮静と内浦資料」、星洋和が「楫西光速について：戦前の活動と製塩業研究とのかかわりを中心に」をそれぞれ発表し、話題提供とした。

最後に、国立民族学博物館で長年アチック・ミューゼアムの研究をされてきた故近藤雅樹氏の蓄積してきた資料を、同館の「保谷資料プロジェクト室」にて閲覧し、岡田祐子氏の協力のもと本共同研究に関係するデータの提供を得た。

＊鹿児島県・喜界島での共同調査

日程：2016年2月21日（日）～22日（月）

調査先：鹿児島県大島郡喜界町（喜界町図書館、阿伝集落ほか）

参加者：加藤幸治、安室知、磯本宏紀、小島摩文氏（鹿児島純心女子大学教授）

アチック・ミューゼアムに彙報やノートで多くの成果を残した岩倉市郎のフィールドである喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）での巡検を共同調査として行い、現地調査のコーディネートを小島摩文氏（鹿児島純心女子大学教授）にお願いした。

写真４　喜界島・阿伝集落遠景

2016年2月21日は、喜界町埋蔵文化財センター主事の松原信之氏に調査に同行していただいた。当日朝、喜界島に到着してすぐに喜界町図書館の郷土資料室にて、岩倉市郎および拵嘉一郎に関する文献調査を行った。岩倉市郎の顕彰関係の資料や、島民および全国の喜界島出身者による文集など、現地でしかみることのできない資料を閲覧した。文献の検索等においては、同館司書の米田真由美氏の助力を得た。午後からは、岩倉市郎の出身地でもある阿伝集落を訪問し、郷土史研究家の政井平進氏、元役場職員の得本拓氏よ

り、阿伝集落についてご教示いただき、岩倉市郎が集中的に調査を実施していた昭和10〜12年の阿伝集落の状況について聞き取りをすることができた。また、岩倉市郎が「喜界島阿伝村立帳 喜界島調査資料第3」（アチック・ミューゼアム彙報41、昭和15年）として翻刻した史料の熟覧調査を行った。その後、政井先生の案内によって、阿伝集落内を巡検した。

翌日の22日は、教育委員会生涯学習課係長の壽満夫氏に、調査に同行していただいた。午前中は、町内で調査中の上増遺跡の発掘現場を見学、中世の喜界島に形成された大規模集落の遺構について説明を受け、その後、喜界町埋蔵文化財センター展示室にて島内の主要な遺跡の代表的な遺物を見せていただいた。午後からは、喜界町立歴史民俗資料館と町内にある休校の小学校校舎に保管されている民具の熟覧調査も行った。

岩倉と拵の仕事がアチック・ミューゼアムの水産史研究においてどのような位置にあったのかを考える契機となった。

写真５　「喜界島阿伝村立帳」の熟覧調査

写真６　阿伝集落の岩倉市郎顕彰碑

②二年次の研究会と共同調査

＊第3回研究会の開催

日程：2016年7月17日（日）

場所：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科演習室

参加者：加藤幸治、磯本宏紀、今井雅之、揖善継、佐藤智敬、葉山茂、日髙真吾、星洋和、増﨑勝敏、安室知

2016年7月17日、第3回目研究会の午前の部は、加藤幸治と今井雅之氏が調査の中間報告等を行った。午後の部は、磯本宏紀氏と安室知氏が調査の中間報告を行った。すべての報告の後、今年度の各メンバーの調査計画、および合同調査についての打合せを行い、研究会を終了した。

＊第4回研究会の開催と国立民族学博物館での共同調査

日程：2017年1月21日（土）〜1月22日（日）

調査先：国立民族学博物館

参加者：加藤幸治、安室知、日髙真吾、葉山茂、増﨑勝敏、磯本宏紀、佐藤智敬、星洋和、今井雅之、宮瀧交二

2017年1月21日は、この事前申請していた標本資料の熟覧調査を行った。調査した民具は山口和雄収集

写真７　アチック・ミューゼアム・コレクションの熟覧調査

写真８　研究会のようす

写真９　国立民族学博物館常設展示場での議論

民具、櫻田勝徳収集民具（山口と共同収集を含む）、進藤松司収集民具、佐藤三次郎収集民具、喜多村俊夫収集民具、渋沢敬三と宮本馨太郎収集民具一括資料１件（209 点）であった。調査では、年譜や著述ではわからない研究過程を復元することができる可能性があることがわかり、今後の課題として共有した。

22 日は、国立民族学博物館の第３演習室にて研究会を行った。まず加藤が人物検索から見えてくるアチック・ミューゼアム・コレクションの構築過程と、水産史研究室同人の動向について振り返った。次に佐藤智敬氏が、宮本常一の戦前の調査研究活動についての年譜的な理解と、未公開資料の調査について報告を行った。また、展示場での資料調査も行った。

③三年次の研究会と共同調査

＊第５回研究会の開催と宮城県仙台市での共同調査

日程：2017 年 11 月 4 日（土）

調査先：東北歴史博物館、東北学院大学、東北大学史料館、宮城県仙台市青葉区米ケ袋地区

調査者：加藤幸治、今井雅之、揖善継、佐藤智敬、星洋和、増﨑勝敏、安室知、佐藤麻南（東北学院大学大学院文学研究科）

2017 年 11 月 4 日の午前中は、東北歴史博物館（宮城県多賀城市）において、狩猟や漁撈関係する東北地方の民俗資料について情報交換を行った。そこから、東北学院大学（宮城県仙台市青葉区）に移動した。

午後は、東北学院大学から徒歩で仙台時代の渋沢敬三関係の場所を巡検した。まず、東北大学史料館において、旧制二高についての展示を中心に見学し、時代背景や当時の学都：仙台の状況について情報共有した。そこから、敬三らが共同で下宿した旧デニング邸跡や、米ケ袋地区を巡検した。当時の米ケ袋地区は、外国人宣教師や英語教師などの邸宅や別荘が軒を連ねる地域であった。現在は、一棟だけ残っている東北学院大学土樋キャンパス内の重要文化財：東北学院旧宣教師館（デフォレスト邸）がその名残をとどめている。

巡検終了後は、東北学院大学にて研究会を実施した。内容は、現在進めている未完の筌研究関連資料の調査についての中間報告、来年度実施予定の報告会と、刊行予定の報告書の全体像について、検討を行った。

＊第６回研究会の開催と国立民族学博物館での共同調査

日程：2018 年 1 月 20 日（土）～21 日（日）

調査先：国立民族学博物館

参加者：加藤幸治、増﨑勝敏、日髙真吾、佐藤智敬、磯本宏紀、星洋和、今井雅之、葉山茂、宮瀧交二、神野善治（武蔵野美術大学教授）

2018年1月20日は、収蔵庫において資料の熟覧を行った。今回は宮本常一、伊豆川浅吉、吉岡高吉らの収集民具、渋沢敬三名義で収集された播州針のサンプル資料、「脇本村」の検索でヒットした吉田三郎の収集民具を集中的に調査した。また日本青年館からの寄贈資料も調査を行い、アチック・ミューゼアムと日本青年館の郷土資料陳列室との関係について検討する材料とした。

1月21日は研究会を行い、増﨑勝敏氏の報告「櫻田勝則収集の志賀島のハコフグについて」、宮瀧交二氏の報告「渋沢水産史研究室による漁業史研究の歴史的背景について」のあと、自由討論を行い、アチック・ミューゼアムと水産史研究室の活動の時代的背景や、同人それぞれの問題意識の違いなどについて議論を深めた。そのあと、プロジェクトの最終報告会と報告書、今後の展開などについて自由に議論を行った。

＊第7回研究会の開催

日程：2018年3月12日（月）
調査先：神奈川大学日本常民文化研究所
参加者：加藤幸治、安室知、磯本宏紀、星洋和、佐藤智敬

2018年3月12日の研究会では、共同研究の最終総括に向けた研究会を行った。

本共同研究の最終成果報告会のシンポジウムを2018年7月7日に決定し、報告会では各メンバーの調査成果報告で構成し、その内容は報告書にも反映していくことを共有した。

また、報告書では、本共同研究の調査の過程で発見したり、整理作業を行ったりした未発表資料について掲載することになっており、その段取りについても話し合った。

終了後、参加メンバーの一部は、日本常民文化研究所の所蔵資料の熟覧調査を行った。

④最終報告会の開催

＊国際常民文化研究機構　第4回共同研究フォーラムの開催

日程：2018年7月7日（土）
会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館305講堂
報告者：加藤幸治、宮瀧交二、今井雅之、安室知、増﨑勝敏、佐藤智敬、磯本宏紀、葉山茂、星洋和、今井雅之、日髙真吾、揖善継、佐藤麻南（東北学院大学大学院文学研究科）

2018年7月7日（土）、共同研究の3年間の成果報告会として第4回共同研究フォーラム「再考 アチック・ミューゼアムの水産史研究―“ハーモニアス・デヴェロップメント”の実像―」を実施した。

フォーラムは4つの内容で構成した。第一は、研究代表者の加藤幸治による「Ⅰ 問題提起」であり、「アチック・ミューゼアムの水産史研究における『問題意識の多様性』と『同時代的な布置』」と題して、フォーラム全体の趣旨と共同研究のプロジェクトの概要説明を行った。第二は、「Ⅱ アチック・ミューゼアムの同時代的な布置」と題して、「渋沢水産史研究室による水産史研究の歴史的背景について」（宮瀧交二）、「戦前の地方農村青年をとりまく思想的・社会的状況について」（今井雅之）、「未完の筌研究にみる渋沢水産史研究室の調査法」（加藤幸治）の三つの報告を行った。

午後は、第三の内容で「Ⅲ 水産史研究室の同人らにみる問題意識の多様性」と題して、「渋沢敬

写真 10　最終報告会のようす

写真 11　集合写真

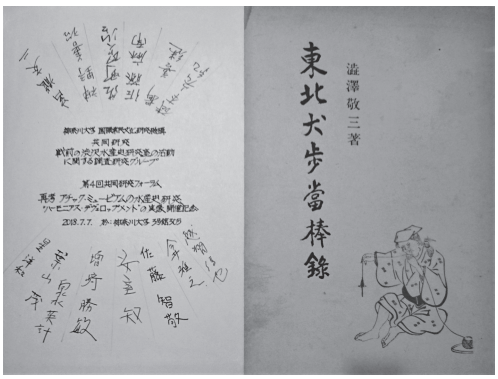

写真 12　私たちのハーモニアス・デヴェロップメント

三と魚名研究―その特徴と学史的意義―」（安室知）、「桜田勝徳の志賀島採集のハコフグの剝製について」（増﨑勝敏）、「宮本常一による昭和 10 年代民俗調査の足跡」（佐藤智敬）、「山口和雄の網漁業研究にみるアチック・ミューゼアム時代の水産史研究の位置づけ」（磯本宏紀）、「祝宮静の豆州内浦漁民史料調査にみる水産史研究の展開」（葉山茂）、「楫西光速の塩業研究にみる渋沢水産史研究室の経済史学的一面」（星洋和）、「戸谷敏之の問題関心にみる魚肥研究の位置づけ」（今井雅之）、「伊豆川浅吉の捕鯨研究と鯨肉食通信調査」（佐藤麻南、東北学院大学大学院文学研究科・博士前期課程）の報告をそれぞれ行った。

最後に「Ⅳ　コメント・ディスカッション」として、共同研究メンバーである揖善継と、国際常民文化研究機構の別の共同研究（一般）「民具の機能分析に関する基礎的研究」の代表をつとめる神野善治氏と何人かのメンバーからコメントを得た。そして、登壇者全員がならび、会場を交えてのディスカッションとなった。

アチック・ミューゼアムが、水産史研究を推進していった背景として、戦時体制特有の問題や政策、対外的な関係や資源の確保、時代特有のイデオロギー等が、渋沢敬三の研究と水産史研究室のメンバーの調査活動に、どのような影響があったのかが、議論の的となった。本フォーラムで提示したこうした「同時代的な布置」は、単に学問とナショナリズムの議論に回収されないかたちで、いかに近代史および学術研究の歴史に位置づけるかも論点として浮き彫りとなり、年度末に刊行予定の最終報告書（本書）の作成の重要な論点を得ることができた。

3. 本報告書の構成について

本報告書には、共同研究「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」の研究メンバーそれぞれが、具体的に明らかにした同人の事績や、渋沢水産史研究室の研究方法についての検討を収録した。また、今後のアチック・ミューゼアム研究に資するため、未公開資料の翻刻や紹介等も意識的に掲載した。

「アチック・ミューゼアムの水産史研究における「問題意識の多様性」と「同時代的な布置」は、渋沢水産史研究室の活動の全体像を紹介しつつ、本報告書の意図を明示する役割を担っている。“水産史研究の同時代的な布置”のテーマには、宮瀧交二「渋沢敬三による水産史研究の歴史的背景について」と今井雅之「戦前の地方農村青年をとりまく思想的・社会的状況について」、加藤幸治「未完の筌研究にみるアチック・ミューゼアムの調査法」の三本で構成する。宮瀧は歴史学の観点から戦前・戦中の研究をめぐる同時代的状況について概観し、今井はアチック・ミューゼア

ムの活動に参画した青年たちの思想形成と彼らの社会的位置について考察する。加藤はアチック・ミューゼアムが何度も活用した郵便を用いた通信調査の手法について紹介し、未公開資料である神奈川大学日本常民文化研究所、および国文学研究資料館所蔵「筌調査票」の翻刻を掲載した。この翻刻作業は、神奈川大学日本常民文化研究所が行い加藤が監修した。

水産史研究室同人の“問題意識の多様性”のテーマには、以下の研究ノートを掲載した。安室知「渋沢敬三と魚名研究―その特徴と学史的意義―」は魚名研究を水産史研究にとどまらない民俗学の方法論に関わる問題として位置づけ直すことから見えてくるものを考察している。あわせて未公開資料として神奈川大学日本常民文化研究所所蔵「魚名調査票」資料を掲載している。磯本宏紀「山口和雄の網漁業研究にみるアチック・ミューゼアム時代の水産史研究の位置づけ」は、水産史研究室のなかでも日本水産史を視野に研究に取り組んだ山口和雄の戦前の研究実践について明らかにしている。増﨑勝敏「桜田勝徳採集のハコフグの剝製について」は、もっとも精力的にフィールドワークを行った同人のひとりである桜田勝徳の具体的な調査研究について紹介している。葉山茂「祝宮静の豆州内浦漁民史料調査にみる水産史研究の展開」では、『豆州内浦漁民史料』刊行後も内浦の史料整理と調査を継続した祝の研究について紹介している。佐藤智敬「宮本常一による昭和10年代民俗調査の足跡」では、渋沢敬三自身の研究テーマを調査や資料収集の面から支えた宮本の戦前の調査の実態に迫る。今井雅之「戸谷敏之の問題関心にみる魚肥研究の位置づけ」では、志なかばで戦死した戸谷の経済史研究の意義について紹介している。星洋和「楫西光速の塩業研究に見る渋沢水産史研究室の経済史学的一面」は、アチック・ミューゼアム、そして戦後の塩業研究において中心的な役割を果たした楫西の調査研究について紹介している。佐藤麻南「伊豆川浅吉の捕鯨研究と鯨肉食通信調査」は、捕鯨と鯨肉の分配に関わる伊豆川の研究の全体像を紹介し、未公開の流通経済大学図書館所蔵「鯨肉に関するアンケート回答」の翻刻を掲載している。

しかし、これら渋沢水産史研究室の同人らの具体的な記述のみが成果なのではない。「水産史研究の同時代的な布置」と「問題意識の多様性」というふたつの課題にたどり着いたこと自体が、三年間の共同研究の最大の成果であるというのが、研究代表者としての筆者の率直な実感である。渋沢敬三が謳った“ハーモニアス・デヴェロップメント”が生み出すものは、“問い”の発見である。それは人文学の可能性であり、現代の私たちがアチック・ミューゼアムから受け継ぐべき研究態度であろう。